

2019年06月16日(日)
10時～16時
真宗大谷派(東本願寺)札幌別院

全国足湯ボランティアフォーラム in 北海道
～広げよう！足湯で繋がる支援の輪～
北海道胆振東部地震の今と、これからを考える

参加者50名程

認定NPO法人レスキューストックヤード・震災がつなぐ全国ネットワーク
／北海道NPOサポートセンター・一般社団法人ウェルビーデザイン・一般社団法人いっ
ぽん・災害支援ネットワークじゃがネット・一般社団法人北海道介護福祉士会・一般社団
法人北海道精神保健福祉士協会・公益社団法人シャンティ国際ボランティア会・しずおか
茶の国会議・被災地支援ボランティア団体「おたがいさまプロジェクト」・札幌発東北大
好き隊などの団体が参加(協力は次第へ)

☆「足湯隊」は、仲間作りを目的に開始されたよう

北海道は、9月24日の活動が最初で、13団体が参加しています。

☆NPO法人北海道NPOサポートセンター 定森氏より報告

団体の活動状況と、今後の希望として「住民の声を丁寧に拾えるボランティアが増えること」が希望と発表。

☆パネルディスカッション

・一般社団法人ウェルビーデザイン 本田氏

足湯隊事務局であり、中心となって現場でも活動をしているが、現在、活動出来る人が少ないことが悩みであり、また、モチベーションをどう保つかと言うテーマも抱えながら活動をしている。

・公益社団法人シャンティ国際ボランティア会 飯嶋氏

曹洞宗が、立ち上げた団体

飯嶋氏自身が、支援者は、「スーパーマン」と思っていたが、そんなことはなく、誰でも最初があり、繋がる事が出来る。自分にできることがある。

ボランティア活動は、対象者小さな変化に気付ける。けど、自分の変化もあると感じて活動をしている。

・認定NPO法人レスキューストックヤード(RSY) 吉林氏

専門家に相談は敷居が高いので、足湯などは「相談しやすい場作り」でもあり、繋ぐこ

とが出来る活動。そして「私にも出来ることがある」相手が「気持ちがよかった」とかの感想が励み。

・しずおか茶の国会議 玉林氏

呉市での活動では、生活保護課の職員もいて、声を拾っていた
バスで被災地に移動している

被災地支援ボランティア団体「おたがいさまプロジェクト」 大竹氏

歴史の浅い団体ですが、想いは同じに、活動...

実際に行けなくても「声に出すこと」は凄く大切なことと思っている。

村井氏からコメント「湯」は不思議な力がある。足湯は誰でも出来る。北海道は、普通の暮らしに入っているのが良い。足湯は、防犯にもなっている。

午後

☆講演

被災地NGO協働センター 顧問 村井 雅清氏

「足湯ボランティア活動の本質を考える～寄り添い、個の尊重～」

北海道は自主的な動きが多いと感じている。

- ・空港で外国人に案内
- ・被害保育園にSNSで呼びかけ、保育士などのボランティア
- ・水運び、炊き出しなど、勝手連的ボランティア等々...

足湯の始まり...は、阪神淡路大震災で、鍼灸師が、体を暖めたのが最初

「つぶやき」は、新潟中越地震から

神戸宣言...

1995年12月10日 被災者生活再建支援法のきっかけとなってももの。

村井氏らが、阪神淡路大震災後、2年を前にした被災者の厳しい生活の一端を「つぶやき」から引き出し、被災者1,000人の声を100の提言にまとめ「市民が作る復興計画」としてまとめた。

1998年神戸宣言では、「置き去りにされつつある弱い立場にある市民に寄り添うことを」・・・こころのケアセンターが設置される。(阪神淡路大震災は、ボランティア元年だそうです)

ボランティアも、ボランティア慣れした人だけだと、活動としては硬直することもある。また、ボランティアをする人の習性は「人の行かない所に行く」人が多いそう。ボランティアは「何でもあり」でないとダメみたい(最近の人はマニュアルに沿っている人が多く

なったそう。)

1995年9月14日の神戸新聞の記事から気になる言葉「(孤独死した方を) ボランティアが発見できなかった」→これは、ボランティアのせいですか？室谷仮設のエピソード...どう、防ぐかが課題。

つぶやきは、自分との語り合いである (自立支援のための前提)

まとめの代わりとして

「被災地の私たちは、自ら「語り出す」「学ぶ」「繋がる」「つくる」「決める」行動を重ね、新しい社会システムを創造していく力を養っていくことから、私たち自身の復興の道を踏み足していくことを、強く呼びかける。」1995年神戸宣言から

☆足湯体験を行う。

北海道介護福祉士会会員がデモを行う。

